

## 秋まき小麦の止葉期以降の追肥の考え方

### 1. 秋まき小麦の生育状況 (6月1日現在)

5月3半旬以降、低温寡照に加えて少雨で経過していることから、草丈は平年よりも低く推移し、生育は平年より3日ほど遅れています。今後の気象により回復することが期待されます。

表1 6月1日現在のきたほなみの生育状況 (十勝農業改良普及センター本所)

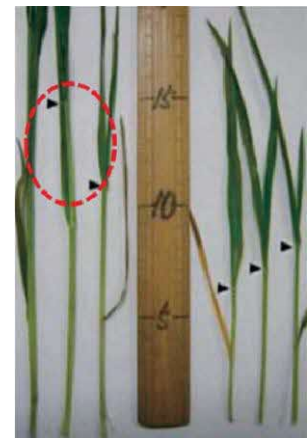
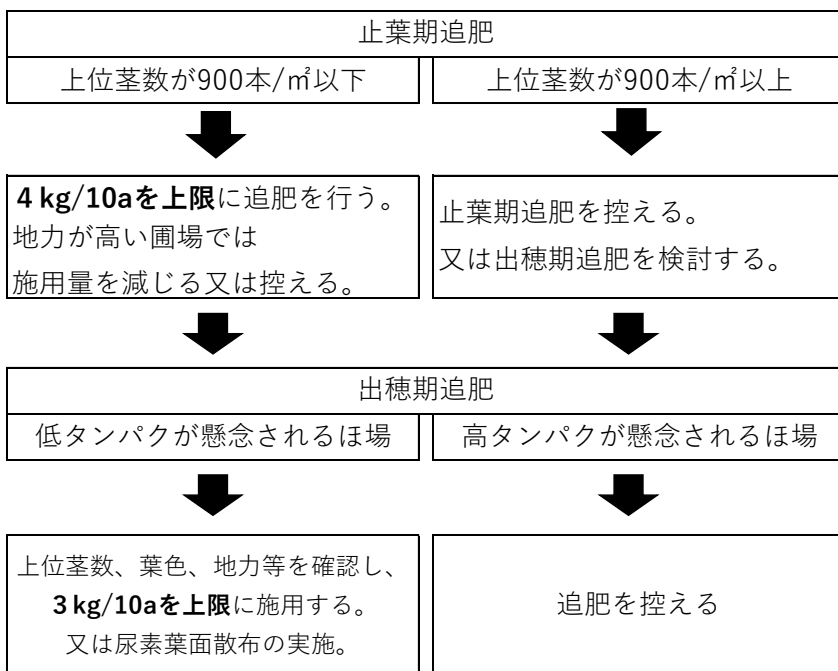
	草丈 (cm)	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	遅速	これまでの生育期節		
				起生期	幼穂形成期	止葉期
本年	54.3	1,181	-3	3月29日	5月4日	5月30日
平年	58.5	1,120		4月1日	5月1日	5月27日
前年	63.1	983	+6	3月19日	4月28日	5月24日

### 2. 止葉期以降の追肥の考え方について

止葉期以降の追肥は、止葉期の上位茎数と目標収量 (720kg/10a) を指標とします (図1)。

- (1) 止葉期の管理：倒伏や遅れ穂の発生を避けるため、追肥量は4kg/10aを上限として実施。  
 上位茎数 900 本/m<sup>2</sup>を超えている場合：止葉期の追肥は控え、出穂期以降の追肥を検討。  
 上位茎数 900 本/m<sup>2</sup>未満の場合：追肥量を4kg/10aを上限として実施し、出穂期の追肥を検討。
- (2) 出穂期の管理：遅れ穂の発生や高タンパクを避けるため、3kg/10aを上限として実施。  
 高タンパクが懸念されるほ場：出穂期の追肥を控える。  
 低タンパクが懸念されるほ場：出穂後の追肥または葉面散布を検討。

※止葉期の上位茎数とは、止葉期における最上位展開葉の葉耳高が10cm以上の茎を「上位茎」とし、10cm未満を「下位茎」として区別するものです (写真)。



写真

止葉期の上位茎 (左: 葉耳高 10cm 以上)

と下位茎 (右: 同 10cm 未満) の区別

(▶ は止葉の葉耳を示す)

図1 秋まき小麦の止葉期以降の追肥の考え方